

1. 団体の設立趣旨

つながりあう社会へ

私たちは今、高度な効率化・情報化がすすんだ、便利な社会に暮らしています。

しかしその裏で、人と人の繋がりは薄れ、深い孤独感が蔓延し、地域コミュニティが崩壊するなど、社会の問題も深刻化しています。

世界では、これまで貧しいと言われていた国々が急激に発展し、豊かさを享受する人が増える一方で、開発による環境破壊、貧困格差、エネルギー・資源をめぐる問題など、多くの深刻な事態も表面化しています。

そんな中起きた東日本大震災と原発事故は、私たちにコミュニティの大切さとその危機を痛感させました。

今、こうした数多の問題を抱える社会を生きていくためには、多様な情報や選択肢から、自ら考え、選び、行動する力を一人一人が身につけることが肝要です。しかし過剰な情報や便利すぎる社会はその力を奪い、生きる力を弱めています。

ゆいツール開発工房（ラボ）の主メンバーは、環境省の体験的な学びの場づくりに6年以上携わってきました。その現場経験の中で、市民の手による課題解決の必要性和、コミュニケーションによる学び合いの可能性を見い出しました。

人と人の関わり合いや繋がりが、社会の中で損なわれつつある「絆」や「生きる力」「生きる知恵」を取り戻す鍵ではないかと考えます。

そこで、「NPO法人ゆいツール開発工房」を設立し、人と人の結びつきを生み出す道具やしくみ（ゆいツール）を開発することで、社会の中にコミュニケーションや学びの機会を増やし、地域でさまざまな人たちがともに学び合う基盤づくり、持続的に活動展開できる環境づくりなどをサポートし、持続可能でいきいきとした地域コミュニティづくりのお手伝いをしていきたいと思っています。

2. 団体の目的と主な事業

ゆいツール開発工房^{ラボ}は、広く日本や世界の人々に対して、ESD（持続発展教育）プログラム開発をはじめとした教育活動事業等を行うことで、社会の中に世代や立場を越えたコミュニケーションや学び合いの機会を創出し、地域コミュニティの持つ課題（環境破壊、少子高齢化、地域文化の衰退など）の解決や、持続可能な社会構築に寄与することを目的とする。

- (1) ESD（持続発展教育）に関わるプログラム開発事業
 - ・ ツールの開発（さまざまな人を対象とした環境教育のための教材開発）
 - ・ 展示パネルの製作
- (2) ESD（持続発展教育）に関わる人材育成事業
 - ・ 指導者育成（環境教育リーダー、インタープリター等の育成）
- (3) ESD（持続発展教育）の社会展開のための事業
 - ・ 参加型プログラムの実施（開発したツールを使った参加型ワークショップの実施）
- (4) 教育活動、地域活性化事業等を行う他の団体との情報交換及びネットワークの構築事業

3. 団体の役員

ゆいツール開発工房^{ラボ}は、以下の役員によって運営されている。

理事長	山本 かおり	
副理事長(旧)	岡田 厚子	(2014年5月末辞任)
副理事長(新)	小嵐 妙	(2014年5月末就任)
理事	松原 裕子	有限会社イリュージョンミル代表取締役
理事	松原 雅裕	デジタルウムプロジェクト！主宰
理事	森 高一	
監事	小山 庄三	

4. 会計報告

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房^{ラボ} 貸借対照表(2013年3月31日現在)

(単位:円)

(資産の部)		(負債の部)	
預金	255,075	借入金	100,000
未収金	83,000	(正味財産の部)	

2013年度 特定非営利活動に係る事業 活動計算書
2013年4月1日から2014年3月31日まで

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房 (単位:円)

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 会費・入金収入			
会費・入金収入			
会費収入(正会員)	110,000		
会費収入(賛助会員)	20,000	130,000	
2 事業収益			
①ESDに関わるプログラム開発事業	1,099,418		
②ESDに関わる人材育成事業	3,209,950	4,309,368	
3 寄付金収入			
寄付金	195,000	195,000	
4 その他収益			
利息	47		
雑収入	15,920	15,967	
経常収益計			4,650,335
II 経常費用			
①ESDに関わるプログラム開発事業			
(1)人件費	270,000		
(2)その他経費	843,819	1,113,819	
②ESDに関わる人材育成事業			
(1)人件費	836,911		
(2)その他経費	2,583,102	3,420,013	
雑費	27,250	27,250	
経常費用計			4,561,082
当期経常利益額			89,253
当期正味財産増減額			89,253
前期繰越正味財産額			238,075
次期繰越正味財産額			327,328

特定非営利活動法人ゆいツール開発工房 貸借対照表(2014年3月31日現在)

(単位:円)

(資産の部)		(負債の部)	
預金	953,902	前受金	370,000
未収金	163,000	未払費用	19,574
		借入金	400,000
		(正味財産の部)	
		一般正味財産	327,328
資産合計	1,116,902	負債・正味財産合計	1,116,902

貸借対照表脚注

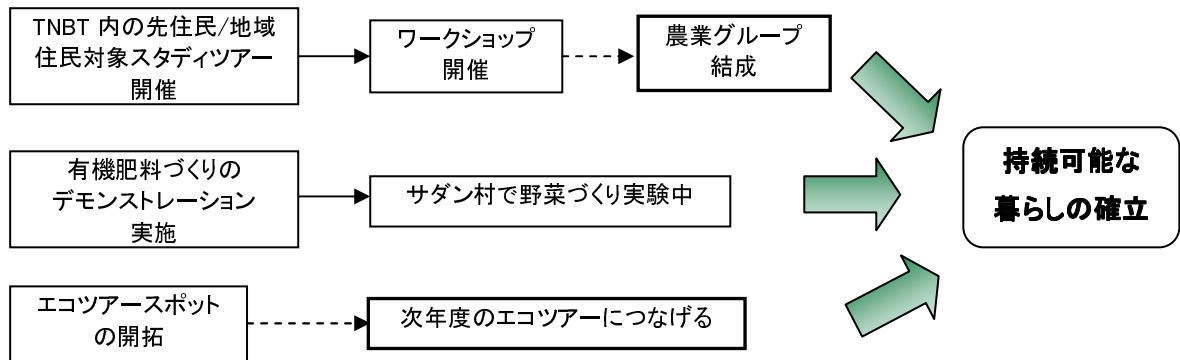
- ・未収金 163,000 円は②人材育成事業に関わるもので、4月26日に回収済みである。
- ・未払費用 19,574 円のうち 160 円は雑費に関わるもので、4月3日・5月23日に各 80 円ずつ支払い済みである。19,414 円は①プログラム開発事業に関わるもので、うち 1,994 円は 4月3日に支払い済み、17,420 円は 5月7日に支払い済みである。
- ・前受金 370,000 円は、①プログラム開発事業に関わるものである。

5. 活動報告

1. スマトラ島の森林保全をテーマとした ESD プログラムの開発～先住民・地域住民対象のスタディツアーの実施及びエコツーリズムの発展～

地球環境基金の助成を受けて、インドネシア・スマトラ島での活動を以下のとおり行った。詳しい報告については、別紙のとおり。

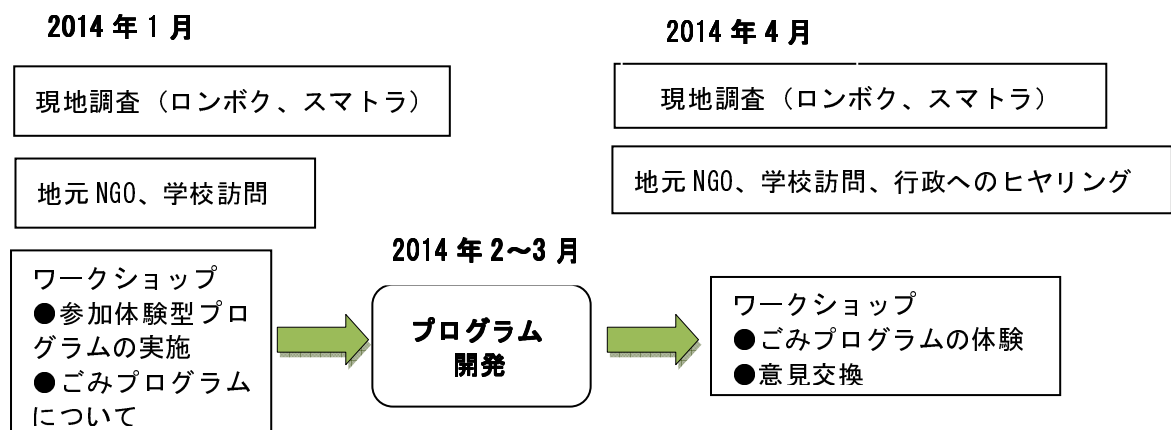
- ◆ TNBT 内の先住民・地域住民対象のスタディツアーを実施した。(10名参加：6日間)
- ◆ スタディツアー参加者を対象としたワークショップを開催し、村で行う取り組みについて意見交換を行った。
- ◆ 学生環境団体「オアシス」と TNBT のレンジャーとともに、リアウ州の新たなエコツアーのスポットを開拓した。
- ◆ 農業局スタッフの協力を得ながら、レマン村・サダン村で有機肥料づくりのデモンストレーションを行い、その後サダン村で野菜作りの実験を継続中。



2. インドネシア・ロンボク島における環境保全のための ESD プログラム開発・人材育成事業～指導者同士のネットワーク形成と研修カリキュラムの構築～

公益信託地球環境日本基金の助成を受けて、インドネシア・ロンボク島での活動を以下のとおり行った。詳しい報告については、別紙のとおり。

- ◆ 現地調査（ごみの様子）（計 8 か所）
- ◆ 地元 NGO の活動見学、学校訪問、行政との意見交換など（述べ 9 か所）
- ◆ 関係者向けワークショップの開催（2 回）



3. 幼児向け環境教育プログラムの開発及び実施（8 月、11 月 計三回）〈写真 1~4〉

- 依頼元：クレシュ新横浜（0~2 歳児対象の民間の保育所）
- 担当：岡田厚子
- 日時：①2013 年 8 月 27 日（火）10：00~（2~3 歳児）、10：35~（1 歳児）
②2013 年 11 月 8 日（金）10：00~（2~3 歳児）
各回 30 分程度
- 対象：1~3 歳の園児
- 内容：①「スポンジ編」／参加者数：約 26 人（1 歳児 15 人、2~3 歳児 11 人）
スポンジに水を吸わせ、握って絞る、吸わせた水を他へ移すといった体験を通して、手先の運動を調整する練習をするとともに、生活の手仕事や道具、水の性質について学ぶ。
②「葉っぱの形編」／参加者数：約 11 人（2~3 歳児）
さまざまな葉の実物や、葉の写真カードを使った体験を通して、視覚による形の識別の練習をするとともに、自然の造形の多様性を学ぶ。
- ふりかえり
 - ・今年度は 4 回の実施を予定して企画を提案したが、園の都合により結局 2 回しか実施できず残念だった。
 - ・内容は、全ての企画にモンテッソーリ教育の要素を入れるようにした。岡田の学んだ 3~6 歳向けのプログラムを 1~2 歳児向けにアレンジしてみたが、特に 2~3 歳児は問題なく内容をこなしていて、予想以上の手応えを感じた。
 - ・園長や子どもたちには喜ばれていたと感じており、開発したこれらのプログラムを活かせる場があれば、今後も実施や開発をしていきたい・・・と考えるが、なかなか現実には難しいところがある。個人的な場でも細々とでも、地道にチャンスを窺っていかれたらと考えている。

4. 大阪府みどり公社からの依頼でプログラム開発とその体験講座など〈写真 5~8〉

- 依頼元：一般社団法人大阪府みどり公社
- 担当：山本かおり、岡田厚子、宮腰義仁
- プログラム開発について
「自分の暮らしと世界のつながりプログラム」
概要：「無印のノート」「インドネシア製のコピー用紙」「パーム油を使ったせっけん」「パーム油を使ったお菓子」など自分の暮らしに身近にあるものと、熱帯の森の問題をつなげて考えてみることで、生物多様性の喪失、野生動物の絶滅の危機、森とともに生きてきた人々の暮らしの変化などを、自分の暮らしの延長に置いて考えてみる。持続可能な暮らし、自分の未来を選び取っていくための土壌作りとしてのプログラム。

「エネルギー学習プログラム もし〇〇がなかったら?!」
概要：私たちが日々当然のように使っている「電気」をテーマに、それに多くを頼っている自分の暮らしをふりかえり、電気の持つマイナス面（エネルギー源の確保や原子力の問題、災害時の課題、環境負荷等）や、なかった場合の不便さや代替策等について、掘り下げていくプログラム。

- 日程：①2013年10月21日（月）14時50分～16時20分
②2013年10月24日（木）12時55分～14時25分「環境教育論」
③2014年1月27日（月）16時40分～18時10分
④2014年2月24日15時00分～18時10分

○対象者／内容：

- ① 大阪教育大学理科教育講座の石川聡子先生のゼミ生4人／ゆいツールの開発した「自分の暮らしと世界のつながりプログラム」の実施と解説、意見交換など
- ② 大阪教育大学「環境教育論」（1年生）60名程度／ゆいツールの開発した「生きものいろいろ～熱帯雨林バージョン～」の紹介と、製作の意図などを伝える
- ③ 大阪コミュニケーションアート専門学校^の生物専攻の1～3年生（大阪府センター田中さんが受け持つ授業の受講生）13名／ゆいツールの開発した「〇〇がなくてもできるかな?!」の実施と解説。
- ④ 同上 6名／有志学生1名が開発したプログラムをお披露目し、それに対してアドバイスをを行うという内容だったが1時限目は準備が整わず、急遽宮腰によるブレインストーミングやアイスブレイクのアクティビティを実施。2時限目に学生によるプログラム1つ、アクティビティ1つの実施とフィードバック、それを元にしたグループワーク（改善案や環境学習プログラムに必要なこと等を考える）をおこなった。

○ふりかえり

- ① ゼミ生4人ではあったが、ゆいツールの開発した新プログラムを体験してもらい、身近な製品と熱帯の森のつながりについて知り、森の中に暮らす人たちの未来と自分の未来について考えてもらった。また、小学校高学年を対象に製作したこのプログラムの改善点を話し合った。
- ② 昨年度スマトラの活動の為にゆいツールが開発した熱帯林の生物多様性を学ぶプログラムを紹介し、参加体験型で学ぶ意味や、伝える相手に合わせた情報提供の仕方（文字を読めない現地の人のために、文字を使ったフリップなどは使わないなど）などについて、話をした。大勢の学生がいたので、プログラムを実際にじっくりと体験してもらうことができなくて残念だった。
- ③ 大阪府センターの依頼で開発した新プログラム「〇〇がなくてもできるかな?!」を実施。「電気」という身近な切り口で、若者を意識した内容にしていたので、グループワークも楽しそうに取り組んでくれた。殆どの学生がスマートフォンやタブレット、ゲーム機等を愛用し、生活でもIHコンロやエアコンを使うといった現状がわかり、電気に頼る生活が浮き彫りになった。後半は、電気を使わない工夫や災害時のことを想像して考えてもらうパートだが、阪神大震災や東日本大震災の経験もなく、電気のある生活が当たり前になっている学生たちには、単なる空想の域を出ないようでもあった。出たアイデアを実際にやってみたり、体験したりすることができれば、更に深められるのにと感じた。
- ④ この日は田中さんが受け持ってきた本授業の最終回でもあり、田中さんの反省としては、一人の生徒に負担をかけすぎた、学生たちに果たしてどこまで伝わったのか手応えが薄かったと仰っていた。生徒たちのプログラムに対する意見からは、「参加や体験型がいい」「遊びとは違う。楽しいだけじゃない（学べる）」「世代を越えて楽しめるのがいい」と

いった意識が割と浸透していることがわかったが、なかなかそれを自分で実践したり開発したりする立場に持っていく(人材育成)には、時間も手間もかかるということを感じた。

5. 山梨県都留市エコハウススタッフ研修事業<写真 9~12>

○依頼元：都留市役所産業観光課

○担当：岡田厚子

○日時：

研修実施日：2013年6月4日、6月13日、6月28日、7月19日、8月8日、9月13日、
10月22日、11月13日、11月27日

夏イベント開催日：2013年8月23日

○場所：都留市エコハウス（山梨県都留市上谷）

○内容：山梨県都留市役所が運営する環境共生住宅のモデルハウス「エコハウス」を、今後環境教育拠点としていくためのスタッフ研修を、半年の時間をかけて実施。子ども向け環境学習ワークショップやイベントの企画づくり・実施のコツ等について、具体的に企画から実施までを実践しながら研修を行った。

○ふりかえり

都留市エコハウスの常駐スタッフは3名で年齢も若く、毎回楽しく研修に参加してくれた感触はあった。ゆいツールの参加型プログラムをいくつか紹介した際も、「面白い」「わかりやすい」と好感触で、自分でもやってみたいという気持ちを引き出せたようだった。しかし、そもそも現状のエコハウスでは訪れる人も少なく環境教育の実践機会が日常的にないこと、また彼らの雇用条件が1年契約で延長なしであること、予算不足のためエコハウス以外もさまざまな業務を兼任していたこと（小水力発電の視察対応、野菜工場や菜園での試験栽培・研究等）等により、なかなか研修へのモチベーションやその意義を高めていくことは難しかった。さらに、途中から市のエコハウス方針が変わり、次年度から市では常住スタッフを置かず、施設を指定管理に出すこととなったため、内部で人材育成する必要性も薄れていってしまった。最後はスタッフと一緒に作ったプログラムをおこなう冬のイベントの実施許可が下りず、プログラムシートをまとめたのみで終了という、中途半端な終わり方になってしまい残念だった。

やはり人材育成には、ストップおんだん館のように学んだことをすぐに活かし反映できる現場があること、上層部や周囲の関係者にも意思疎通が図れていて活動や方向性への理解が得られていることなどが伴っていないと、十分な成果を得ることはできないと痛感した。

一方で、このような長期の人材育成研修を担当したのは初めてで、時間をかけてじっくり参加者と向き合うこと、不測の事態への対応等々、非常に多くの学びがあった。

6. 東京環境工科専門学校「地球温暖化を考える」授業（1年生向け2コマ）（1月）

<写真 13~14>

○担当：山本かおり、宮腰義仁

○日時：2014年1月24日9時00分~10時30分、10時40分~12時10分

○参加者：48名

○内容：1年生に対して、1現目に地球温暖化について興味を持ってもらうきっかけとするため

に、グループでのプログラム体験を行った。2限目は、仕事と温暖化のつながりを意識するために、ワークショップで実施した。

【1限目】

- ・ “なんだかちょっと変”ワークシートを記入
- ・ クイズ“温暖化のメカニズム”「かくかくしかじかおんだんか」
- ・ “自分の暮らしと地球温暖化のつながりに気づこう”プログラム体験「エコのタネさがし」

【2限目】

- ・ “仕事とのつながり”プログラム体験&ワークショップ「ひと×しごと+おんだんか」

○学生の感想（抜粋）：

- ・ 「平日頃、エネルギーがあることを当たり前として受け取っています。折りに触れ、環境問題の話題を耳にして、大事にしなければと思い改めながら、そのまま時間が過ぎるにまかせているのが現状です。1限目のワークショップで、地球のこと、生活のこと、知っているつもりの方の多さにビックリでした。学校に入って、勉強してきたつもりでしたが、問題を投げかけられると、答えにつまってしまいました。ゴールを決めず知ろうとし続けることが大事だと思いました。仕事から環境を考えるのが、新鮮でした。」
- ・ 「地球温暖化問題は、つい忘れがちになってしまう問題だと思います。ワークショップで改めて意識することができました。どんな仕事をしていても、エネルギーは使うし、温室効果ガスを出しているのだから、自分にはいったい何ができるのかを、よく考えて行動していかなければならないと感じました。また、企業によっては少し環境に配慮しているが消費者の意識が変わらないかぎり難しいと思った。NPOの活動や、ボランティア活動の大切さを、広められる人間になりたい。」
- ・ 「プログラムで使うパネルやマグネットが、イメージしやすく作られていると思った。特に、布に絵を描いたものは、何となくやさしい感じがした。家の中は、エネルギーをたくさん消費するものにあふれていると思った。各自の意見を班の中で話し合うことで、自分にはない考えを聞くことができ、とてもいいと思った。」

○ふりかえり：

例年通り、温暖化のメカニズムや原因を押えた後、「しごとプログラム」を行った。今回は、身近な気候の変化について改めてグループ内で話し合ったあとに、地球温暖化のメカニズムのクイズを行った。また、「しごとプログラム」もワークシートを改良し、じっくりとグループ内で話し合う内容にしたところ、学生の満足度も高くなった。1限目と2限目で、グループのメンバーを入れ替えたこともよかった。これから仕事につく年齢の学生に「しごとプログラム」は、非常にマッチしていると感じた。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14